

日本語と外国語

公教育としての英語はく今以上にヒヤリングとスピーキングに時間をかけるべきではなくて、この両者は必要になったときに集中的にやって、ある程度のレベルまで達することが可能であるし、日本の言語環境に即して考えれば、他の時間を削って時間を大幅に増やさない限り学習効果が望めないし、そのために重要性のオーダーが全く違う、他の基礎的なこと（たとえば国語や数学）を削ることは問題外> という考えに全面的に賛成です。「考える」ことに使う言語として日本語を厳格に丁寧に訓練する必要があります（つまり国語の学習）。買い物や観光程度の英会話に国語の訓練を割愛することは、まさに「問題外」と思います。

そう信じる私的経験を述べます。

1は患者との問診その他のやりとり；買い物観光の英会話や中国会話などより、わが身の出来事を正確に観察記述出来なければならないが、これは知識の多寡ではなく国語の能力にかかわる（としか思えない）。

2は医学生・研修生・医師とのカンファレンス；概念や論理の破綻は診断治療に決定的な過ちをもたらすが、矛盾を自覚しないと過ちとも分からない。観察事項をコトバで記述せずに「あれ、これ」と言うにとどまっては論理展開の土台にもならない。国語訓練の貧弱さがある。

3は、1970年にアメリカ中西部の大学病院に臨床医として留学就職（就労ビザ）したときの自分の体験；英会話はヒヤリングが困難で、テキストブックを著したほどの何人かを前にカンファレンスで自分の事例を始めて呈示したとき、オーストラリア人医師が呈示法を説明したが全く聞き取れず（後日アクセントの大変な違いと知った）、満座の壇上で「言うことがわからない。もう一度言ってくれ」と10回ほど繰り返した。とうとうチェアマンが「君の思うようにやれ」と言ったのでカンファレンスが始まった。電話がかかってくるとよく聞き取れず相手の所まで出向いて直接話しを聞いた（なにせ病院、誤認は禁物、特に夜中の電話はビクビクした）。書物を読むにも時間がかかりアメリカ人とはハンデイが大きい。それでも、1年後には電話は全く苦にならず、1年半後には電話で口論でき、夢の中で英語を話していた。文系の日本人留学生在がいたが、自分はノイローゼ気味で帰国を考えているというのに、その年齢で（30をとうに過ぎていたから）どうして英語を話せるようになったのか、と言われた。あとで振り返って思いましたが、英語会話の慣れではなく、バイタリテイの有無が問題なのだと思います。

中学で始めて出会う英語は、見たことも聞いたこともない、とんでもない代物ですから、これを克服出来るかはバイタリテイの格好なバロメーターとも思うのです。子供も当初「なんだ、これ。わからん！」と騒いでいました。手近に英会話を習っている子も

いましたが、安手の会話ではなく深く複雑な事を読み書く事が出来るように文法のきちんとした英語を身につけるように促しました。日本語で正確に深く話せないで、外国語で話せるわけはありません。

私は当初から主張していますが、力を養う（知識や技能ではない）幼少年期教育の構築が最重要課題と思います。高等教育もその力を前提としなければ成り立ちません。

（高等教育フォーラム 2000.07.30）